

三味線弾きの

名人がずく

◆ 三世長門太夫の三味線を二十六年間弾いたのが、但馬の鬼勝、三代目鶴澤清七。

◆ 氏大夫を弾いた初代鶴澤勝七は、節附の名人、攝津西宮で勝鹿齋といふ名で納まつてゐたが、西宮の勝七で通つてゐた。

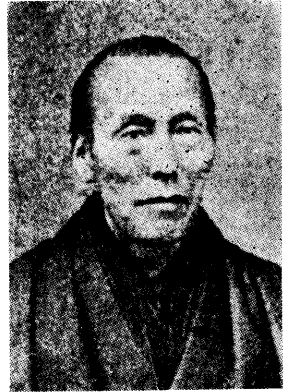
◆ 鶴澤友二郎、野澤喜八郎、といふ二つの元祖名を一人で襲いだのが、五代目友二郎である、人品はよし徳望があつたと見える。

◆ 名人といふほどではないが、鬼寛治と云はれた腕達者の四代目鶴澤寛治が、あの千兩幟の櫓太鼓の曲弾きを始めた(天保年度)

◆ その弟の疊辰、本名疊屋の辰造、藝名竹澤龍造、これが兄以上に曲弾きを流行らせたので、モウ一つ太鼓辰といふ名が殖えた。京町堀籠屋町に住む。

◆ 二代目鶴澤才治は、この曲弾きを江戸へ輸出した、その結果は本家の大阪よりも、ずつと大流行になつた。

◆ 曲弾きとは云つても、後世のやうに、扇、蠟燭、湯呑、巻煙草で弾くといふやうな軽業めいたことは遠がにしてゐない、無論肩や頭の上へ載せて弾くなど、もつての他のことだ。



五代豊澤廣助の像

明治二年堀江の芝居で、竹澤彌七が大三味線を弾いた。俺れだつて負けるものかと、五代目豊澤廣助が二貫目もある釘貫で、阿古屋の三曲を弾いた。さうして溜飲を下げてゐると、組合の因講から、邪道だと云つて除名された。團平が仲裁をしたので除名だけは助かつたが。

大酒家で家政に疎く、廣助にウンと借金を残したので貧乏がよほど身に沁みてゐたものと見える。三味線弾きで二十萬からの財産を作つたのはちよつと珍らしい。この廣助の父の茂太夫が

廣助の家號を松葉屋と呼んだのは、女房のはながお茶屋をしてゐた時の家號で、云はゞちよつと意氣筋なので、仁左衛門の松嶋屋にかけてこんな家號を名乗つたのである。とかく意氣張りの好きな人であつたが。惜しいことには美しい撥搦きをのこして四十二歳で死んでしまつた。

十九の時に巴太夫を弾き、二十一の時に越前大掾を弾いて、後には攝津大掾をあれほどの大物にしたといふ三代目野澤吉兵衛はなる程名人團平に劣らぬ名人だ。この吉兵衛は、住友家へ出入りをした魚屋の倅だといふことだ。

此人の他の眞似手のない點は、どんな大物を弾いても、三味線の糸を損じない、従つて糸を繰り出すことがない、調子を替へるにもたゞ天柱をキユツとひねつて置けば、それで思ふ坪にはまつたのだ。

名人豊澤團平は文政十一年生、十一歳で三代目豊澤廣助の門に入り、博勞町稻荷文樂軒の芝居へ出る。二十八歳長門太夫に見出され明治六年一月文樂座の櫓下となる。十七年文樂を去つて稻荷彦六座に移る。

藝を磨くものには女房は禁物だといつて、三十一歳で妻を娶つた、この妻が二人の兒を残して死んだ、その跡へ迎へた後妻が有名なチカ女である。チカ女は京の西陣の染物屋の娘で、松山の城主板倉周防守女中から殿様の嬖妾になつて、後に恩賜金を貰つて、祇園で茶屋を開いてゐたのだつた。

◆
長門太夫が千本櫻のすしやを語つた。權太が鮎桶を持つて向ふへ入るところ、『金の鮎桶、これ忘れてはと、ひつさげて跡を慕ふて……』と一步踏み出す途端、長門の氣合ひと團平の受け撥、それに玉造の人形の意氣込みとがカツチリ合つて、玉造の腹帯がブツリと切れた。たいへんな力なのだ。

◆
團平の三味線の棹は、かういふ氣合ひが籠つてゐるので、二と三の糸道が、まるで鐵道線路のやうに二本の溝が掘れる。一ヶ月と同じ棹を使ふものなら、絃が溝へ嵌り込んで音色が出ないのだ嘘のやうだが實際だ。

◆
まだ他にも、二十四孝の四段目を弾いた時、例によつて精神が棹へ集注したと見るや否や、テンジから二寸許り下部——コハリの坪のところ——から棹が削けてしまつた。といふやうなこともある。

◆
太功記の十段目、『現はれ出でたる』といふ例の光秀の出、たゞさへ力の籠る團平である。恐ろしい大ノリの夕、キが雷のやうに響いて表の木戸番が、道具が倒れたのだと早合點して、素破こそと勘定場へ飛び込んで來たといふ事實がある。

◆
志渡寺、合邦、太十、帯屋、河庄、堀川、日向嶋………………。團平の絃はまるで太夫の語る以上に、切實な情景を現はしてくる。纏縮の情緒、豪宕壯大、閑寂凄慘、とても字句が無い。

◆
團平はむろん貧乏だつた。それは藝のこと以前に金のことを思はぬからだ。彼がまだ獨身時代のことだつた、或夜泥棒のお見舞を受

けた。團平は盗人にかう云つた『芝居用の着物と三味線と撥の外なら、なんなりと持つて行きなされ』で盗人はそんなものには用はないと、團平の差出す財布を掴んでそのまゝ影を消した。盗人はあとで財布を開いて見ると小遣錢と思ひの外百十兩といふ大金が入つてゐたので吃驚した。後に捕まつた盗人はとう／＼その金に手をつけるのが氣味が悪かつたといつて持主へ返して來た。

團平は非常な親思ひで、それも死んでもう此世にゐない両親によく仕へた。命日には、午前六時に起床、齊戒沐浴して、二階の佛間に籠つて淨机に系圖の一卷を展き、先祖代々父母の法名本名を唱へ、讀經をする。それがすむと、佛前に備へた生魚を自ら料理して、お餘りだと云つて朝食に戴く。これは亡母の遺言に基くのだといふことである。而かも五十年一日の如く欠がさなかつた。



豊澤團平の像

明治三十一年四月二日、稻荷座の二日目、大隅の志渡寺を弾いてゐたが、もう淨瑠璃もあ一枚のところまで語つて來た時、團平は撥を固く手に握つたまゝ動かなくなつた。腦充血を起したのだ。すぐ擔架で病院へ運ぼうとしたその途中、三休橋の北詰まで來た時、彼れはもう息をひき取つてゐた。七十二歳であつた。

團平の枕邊へ集まつた親類や知己の人々は、葬式をする貯への金の無いのに當惑してゐたが、平生よく紙屑籠になんでも物を抛り込む癖のある團平のことだから、念の爲めにといふので屑籠をひつくり返して調べて見ると、案の定封のまゝの金包みが幾つも出て來た。二十萬の財産を作つた廣助は、死んだ團平の手を取つて、『この手だけは何萬兩では買はれぬ手だ』と廣助らしいことを云つた。

團平には澤山の門人もあるが、彼の教へを受けたものは、總計千二百六十名に達してゐたといふことである。蓋世の名人はかうして世を去つたが、その遺香は元より斯道を益したこと夥しいが、こゝに一面團平ほどの氣概あつてこそ通用する傲岸に似た性格を無暗に後輩が學んで、空威張りをするといふやうな風も悪い影響として残つたのは残念なことだ。